

# 「バランス感覚」

～私たちの安定を欠くものは何でしょうか～

ピリピ4：11～13

私たちは、1つの物事に集中すると、そのことだけでいっぱいになって、他にも大事なことがたくさんあっても、他のものが見えなくなる傾向にあります。「こうあるべきだ」という固定概念に執着していると、それ以外のことが自分の身に起きて、それが何なのか分からないのです。そして大切なことも見失ってしまうのです。よく「木ではなく森を見る」と言われます。ある1つのことばかりにこだわって全体を見られなければ、目的も何もかもを見失ってしまうのです。

どんな境遇にあっても満ち足りることが出来る人は、必ず繁栄します。しかし、不足が目がいって不平不満ばかりの人は、ちょっと何かがあると感情的になったり簡単に諦めてしまいます。しかし、繁栄というのは、必ず種まきをして、刈り取るまでの間に苦しみも痛みも経験ながら努力して、待つ、初めて収穫があり、繁栄があるのです。私たちは、種を蒔かなければ収穫できないことを知っています。だから種を蒔き続けるのですが、私たちは繁栄の手前の苦しい時代に諦めてやめてしまいます。だから、生涯、種まき人生です。収穫もなく種を蒔き続けるとうとうなりますか？「どうせ…」という諦めや嫌々する態度になってしまいます。だから種まきと刈り取り、つまり需要と供給のバランス感覚が必要なのです。

ヤジロベエというのがありますが、両端の重さが均等だから揺れても倒れずに元の姿勢に戻ります。私たちの、種まきと刈り取りのバランスも均等でなければ、種まきをしたくても蒔く種が無くなったり、刈り取りがなければ次の収穫に結びつけることができず、バランスを崩すことが、私たちの祝福が壊れるということなのです。

このバランスを保たなければならない種まきと刈り取りを、私たちは感情と知識で行っています。だから種まきをしている最中に何か自分に影響があると、何をしていたのか、何のために種を蒔いていたのか目的を見失ってしまいます。私たちは、種を蒔いている最中に、何かあっても収穫があることを信じ、途中でどんな被害にあってもその中でどう刈り取っていくのか、繁栄を手にするのかを考えていなければいけません。何が私たちの安定を壊すのかを知っておかなければいけません。

与えられたものをより良くするのが私たちの使命であり責任です。私たちは自らの手で種を蒔き、自らの手で苦労して収穫することまでをしなければいけません。そしてこのことを自分に続く人たちに教えることができません。今、自分の置かれた環境で自分に与えられているものをより良く用いていますか？より良くする目的があって、それがどうなるのかを知って収穫している人が初めてより良くしたものから繁栄を得ることが出来るのです。私たちは、お金も生活も、たった1回の人生も預けられているのです。時間が経てば収穫できる…繁栄する…なんてことはありません。苦労して種まきをして育ててこそ収穫・繁栄があるのです。収穫だって苦労します。しかしこそこそと通ってこそ喜びがあるのです。

私たちの繁栄とバランスを壊すもの①諦めです。何かがあると諦めて、さらに「もう〇〇だ」「きつと〇〇に違いない」と勝手に決めつけてしまうのです。誰かのせい、環境のせいにしていたら自分が変わることができません。自分が変われば相手も環境も変わります。私たちがどういう種を蒔いているかが問題なのです。私たちが通して物事が変わるのですから私たちが諦めては終わりです。何かを諦めるということは自分を諦めたということです。収穫、繁栄の喜びを得るまで諦めてはいけません。

そして②先送りの信仰です。私たちは、物事を先送りにして、ギリギリになって慌てるというギリギリ生活をしがちです。どうして人間はこの様な性質を持つのでしょうか？それはアダムとエバの時代にさかのぼります。アダムとエバはエデンの園の木の実を食べていました。苦労しないで食べられていました。しかし罪を犯してしまって、労苦して糧を得て、自分の生活を担保しなくてはならなくなったのです。でも人間は元々、担保する生活を送るように作られていないので「やる気」が出ないと動けない傾向にあります。しかし前述したように、人間が罪を犯してからは、労苦して糧を得る、狩猟・農耕生活を送らなくては行かなくなってしまっているのです。私たちが、やる気が出なくて、物事を先送りしてしまう理由は種まきから刈り取るまでにギャップがあるからです。「すぐに刈り取る訳じゃないから」「今しても、ちょっと先延ばしにしても変わらない」と思っているからです。本能の赴くままに生きてしまっているのです。

この地上で豊かな人は、本能と戦っている人です。凄い人だからできるわけではありません。本能と戦っているだけなのです。私たちは、「明日がある」「誰かがやる」といつまでも受け身です。この受け身の生活から抜け出さないと、私たちから神さまの祝福が流れることはありません。私たちの脳は、やり始めるまでに時間がかかって、やり始めると継続できる仕組みになっています。だから、私たちは意志に基づいて、やる気のない脳にやる気を出さなければいけません。自らの意志で決断して「今」という時に動かなければいけないのです。先延ばしにしていては収穫の時は来ません。収穫がなければ蒔く種がありません。種を蒔かなければ収穫はいつまで待ってもありませんから飢えて死にます。心がずっとそんな状態になっているのです。私たちがもしそうなら、私たちに関わる人がみんなこの様になってしまいます。

これらのことを知っているのに、私たちの繁栄とバランスを壊すものに③癖があるからです。①諦めも②先送りの信仰も強い意志で決断すれば克服できます。しかし癖はどうにもなりません。自分にどんな癖があるか分かっていますか？この癖が分かかっていないと治せません。そして、この癖は家系で伝承します。良い癖が引き継がれるのは良いのですが、悪いものが引き継がれるのは良くないです。神さまは、悪いものをよくするために十字架にかかられました。だから、この悪い癖をよく分かってなければいけません。癖は認めてしまえばラクです。自分が持っている癖を神さまの力によって良いものに変えなければ意味がありません。相手の悪い行動に対しそのまま悪い態度で返しては何の意味もありません。癖には「言い伝えと伝統」「ルール」「人並み」という特徴があります。(マルコ7：13～15)人から出るもの=癖です。諦めも先送りも癖です。だから、これをやめればいいんです。癖を認めることが繁栄の始まりです。

神さまは、私たちの過去の傷を癒し、私たちの苦しみを取り除いてくださいました。しかし、この癖が、私たちが昔の自分に戻そうとするのです。癒されても、今までやってきたくせに基づく行動は変わりません。

聖書にヨブという人が出てきます。ヨブはすごく豊かな幸せ者でした。ただ心配癖がありました。将来に対する心配は不信仰です。ヨブは自分の心配ではなく息子たちのことを心配していました。息子たちももしも罪を犯したらいけないからといって、於かしてもいらない罪のためにいけにえを捧げていたのです。これを毎日繰り返していたのです。だから子どもたちは、だんだん悪くなって、最後には家族が誰もいなくなってしまいました。その後、ヨブの友人が3人來ます。この3人にも「自分のことは棚に上げて他人のことを誹謗中傷する癖」がありました。ヨブは、灰をかぶり神さまに「どうして自分がこんな目にあうのか」と祈り続けていました。するとヨブは変わりました。心配することをやめて、この訓練の中で、自分を誹謗中傷する3人の友人を憎んでいたことに気づき、赦す祈りをしました。そうしてヨブは今までの2倍の祝福を受けたと書かれています。

神さまは、私たちの癖を除くために十字架にかかられました。私たちの人を指さす癖のために手に杭を打たれました。私たちの足が自らで悪い方向に進んでしまう癖があるのを足に杭を打たれました。私たちが自分のことをさしおいて、腹の中で他人を責めるから腹に槍を刺されました。自己中心に王のように揺る舞うから茨の冠をかぶらされたのです。私たちがまだ、この癖を治さないなら、再び神さまを十字架にかけることになり得ます。私たちが見ているのは自分だけなのです。自分たちが任せられたものをしっかりと管理して、種を蒔いて、諦めないで信じて待つ、自分の癖を治すから、刈り取ることが出来るのです。繁栄するのです。自分の問題に、きちんと向き合っただけで出来るようになるのです。色々な指摘を受けることは批判されているわけではありません。訓練です。過去に傷ついた事によって癖を用いて自分を守ろうとしました。神さまの十字架によって傷は癒えましたが癖が残ってしまっただけで私たちが祝福の邪魔をするのです。(箴言3：13～26)諦めるな、先送りするな、自分を見つめる…今聞いたことは全て知恵によって克服するものなのです。克服するために神さまに祈りましょう。そうすると、自分から癖が無くなるだけでなく、家系に伝承されている癖も治ります。

(要約者：行司 佳世)